

十四 元治元年

〔表紙〕
「家譜 慶永公 元治元年 二百八」

〔一八六四〕
元治元年甲子 此年文久四年
二月廿一日改元

一 正月朔日年始為御祝儀例之通御使者を以御太刀・馬代被献之

一 同月四日為年始御祝儀御参内、被拝竜顔

一 同月五日為参予御参内之处、於御所伝奏野宮宰相中将殿別紙之通
(定功)

御達有之

(十七代藩主慶永)
越前前中将

参予毎々参上二付被免勤番候事

但参予御参朝之儀以後不記之

一 正月七日白馬節会二付御参内

一 同月八日左之通於江戸表御用番井上河内守殿江指出之
(正直)

(慶永)
春嶽儀、上京之砌御届申上東本願寺学寮江致旅宿居候处、

旧臘廿一日二条通り屋敷江引移候旨申越候、此段御届申

上候、以上

正月八日
松平春嶽内
草尾精一郎

一 同月十四日公方様京都江着御、依之御機嫌為御伺二条御城江御登
(十四代將軍家茂)

城、其節御懇之上意有之

松平春嶽

暫て今日者天氣も能着致大慶、余寒之处替る事もなふて
一段、久々滞京相替らす尽力満足いたす、猶此上精々骨
折やう二

但伏見御発駕之節同所御小休所江御出迎之儀、昨十三

日御用番酒井雅楽頭殿江御伺書被指出候处、御場所
(忠續)

御間狭二付御出迎二不及、二条御城着御之上二而御

機嫌御伺被成候様御指図二付、御出迎之儀無之

一 御懇之上意有之候二付御札文被指出之、勇姫様(慶永室)も

同断被指出之

一 京都着御二付而之御歛文被指出之、勇姫様も同断
被指出之

一 同日勇姫様佐野小太郎物見江被為入、左義兆馬威御透見被成
(長)

一 正月十六日二条御城江御登城被成候处
一橋中納言様御達二而御用番酒井雅楽

頭殿別紙御書付御達有之

松平春嶽

御用向御相談も可有之候間時々登城候様可被致候

但右二付御用番酒井雅楽頭殿江為御札御使者被指出之、

御札文も被指出之、勇姫様も同断被差出之

一 正月十七日公方様御参内之節供奉被成度旨、御用番酒井雅楽頭殿江御願書被差出候処、御附札を以御差図有之

今般公方様御参内之節、拙者儀隠居之身二者御座候得共致在京居候儀故供奉仕度、此段奉願候、以上

正月十七日

松平春嶽

御附札

可為願之通候

一 同日去五日於御所御当番御免之御沙汰有之候二付、於江戸表御用番井上河内守殿江左之通指出之

春嶽儀去ル五日致参内候処参予毎々参上二付、御所当番御免被成候段、於禁中伝奏野宮宰相中将殿を以被仰出候旨申越候、此段御届申上候、以上

正月十七日

松平春嶽内
片山栄之進

一 正月十九日二条御城江御登城

但以後不記之

一 同月廿日公方様右大臣御転任、依之勅使二条城江参入、右二付御祝儀之御文被指出之、勇姫様も同断被指出之

一 同月廿一日二条御城江御登城、公方様御任官為御札御参内二付御

城も直二供奉、被拝竜顔、還御之節も直二御城江供奉被成候処、別段之訳を以御目見有之、相濟於牡丹之間還御御機嫌伺被仰上、御老中列座御用番酒井雅楽頭殿被謁之、御内証も御祝儀之御文被指出之

但今日供奉之為御札御用番江御使者被指出、御文も被指出之、勇姫様も同断被指出之

一 公方様御参内無御滞被為濟候御祝儀之御文被指出之、勇姫様も同断被指出之

一 今日御参内御供素袍着之面々結城折侍烏帽子相用之、右結城折之儀者御家二而古来も御用ひ之例二候処、中古も觀世折御用ひ二相成候二付、今度御復古二相成

一 正月廿四日御登城、於牡丹之間御用番酒井雅楽頭殿別紙之通御達有之

松平春嶽

御用有之節者御用部屋江も罷出候様可被致候事
右二付御用番江為御札御使者被指出之

一 正月廿七日御参内、被拝竜顔

一 二月三日公方様も時候為御尋不廉立御使御小納戸頭取服部筑後守殿を以御菓子・御交肴御拝領、依之即刻為御札御登城、右二付御

礼文被差出之、勇姫様も同断被差出之

一同日夜五時頃今川橋辺に火、常盤橋御近火二付和宮様・天璋院(家茂室)(十二代将軍家定継室篤姫)(敷)様も御使御広式添番太田芳太郎殿を以御尋有之、右二付御礼文被指出之、勇姫様も同断被指出之

一同月十一日公方様も時候為御尋不廉立御使御小納戸頭取溝口美作守殿を以御火鉢一對・鴨二羽野菜添御拝領、右二付御礼文被指出之、勇姫様も同断被指出之

一同月十二日公方様東本願寺枳穀御殿江被為成候二付為御相伴被為入(般)

一二月十五日御登城昨十四日御老中連名之御奉書来於御座之間替席御黒書院御目見、京都御守護職被蒙仰之

一同日右同断二付御用番水野和泉守殿も御呼出二而、御聞番二条御城江罷出候処御書付御渡有之(忠精)

松平春嶽

京都守護職中御役知五万石被下之

右二付総裁職松平大和守様(直克、武蔵川越藩主)・御老中・若年寄中江為御礼御使者被指出之

一禁裏附・京都町奉行等江者为御案内御使者被指出之

一於江戸表御老中・若年寄中・御側衆江為御礼御使者被指出之
一同断御用番牧野備前守殿江御役知為御届御使者被差出之(忠恭)
一同断三月廿三日御礼文被差出之、勇姫様も同断被指出之

一同日右同断二付御使御側御用人島田近江・御目付中村市右衛門早驅二而御国表江被指出之

一同日公方様御留守中二付和宮様・天璋院様江御機嫌為御伺御文被指出之、勇姫様も同断被指出之

一同日先達而於二条御城上意、且又御両君様共御滞京中兼々御父子様御同意二而思召被為在候御旨趣之御書付、今日御座所於鉄砲之間末々番外以上江茂昭様御直二被仰渡之(慶永・茂昭)(十八代藩主)

上意

国政之儀厚心を配り、文武之世話者勿論節儉取締向等格別二心付可申候、且又若州援兵并海岸防禦筋之儀も厚相心得、無油断様二可致候(若狭国)

△

御直書之写

昨秋茂昭東行、不経月日して帰国候ハ、共二国政を議し、其一定之方向を告知せんと存居候中、豈料依勅命西上す、

然ル処当今幸ニ父子滯京す、故ニ厚及相談其方向を令一定候、今度帰国ニ付而者是を普く一藩ニ示諭せしめ候間、銘々可存其趣候也

第一

情方今之形勢を察する処、内憂外患切迫して累卵よりも危殆ニ及ひ不容易艱難にて、万古無欠之金甌聊ニ而も欠候而者至重至大之御儀、故ニ聖天子日夜被為脳震襟、^{一惱(朱書)}明將軍夜日御痛憂無限、慶永・茂昭不肖庸凡之身ニ候得共、是を恐察奉り候へハ食不下咽喉、夜も不能快寝仕合ニ而、何分皇国二百有余年之昇平ニ馴致して、澆季ニ及ひ候衰運を御挽回被為在度、朝幕之御大政を輔賛し奉り度と日夜之志願不過之候、於銘々も常々是を恐察可致候

第二

我越国者徳川家第一之親藩なり、幕府如斯危殆之時ニ当つて、万一是を度外ニ付し又ハ看過する者、天地之罪人ニあらずや、故ニ慶永ハ不顧不肖朝幕之間ニ在て周施し、第一幕府をして尊奉朝廷之誠意を御竭し有て、君臣の名分日月之如く分明ならん事を令企望候、尤武備を充実にして皇国之衰運を挽回し、皇威を海外ニ偃へ、外国よりも大信義大強国と畏敬すへきニ至らん事結局之志願ニ候、^(ニギノミコト)瓊尊降臨五千年之皇統を無窮ニ連続して、^(徳川家康)神祖偃武三百歳之鴻業を万世ニ伝へ、上者奉安震衷台慮、下者万民之安堵を得させ候而聊奉報答、聖天子之優渥之洪恩、明將軍^{一莫(朱書)}英大之寵遇、祖宗無限之恵沢万分之一度与存詰候、茂

昭亦帰国して励精図治、日夜宰臣与議して其弊政を一新

し、自ら文武を研究し専ら節儉を勤め、我子たる臣下を撫愛し、我子たる生民を安堵せしめんと憤発いたし候、

家中之者一人たりとも万一文武節儉を怠惰して、是を勤る事能はざるは家中者之咎ニハあらず、便慶永・茂昭之怠惰なれハ互ニ鞭策して勤励すへし、所冀家中之者共我父子之心を体察して日夜怠る事不可有候

第三

慶永・茂昭如斯懇切ニ論述するも、我越国をして第一等之信義国となさん事を望む故ニて候、前陳せし如く徳川家第一之親藩ニ在ながら、君臣怠惰して廉恥もなく道理もなき国といはれんハ、実ニ奉対祖宗之靈申訳もなき次第ニて、憤懣之至ニ堪す、故ニ他国ニ超越して文武を励み徳を脩めて第一等之国たらん事を願ふなり、一藩も亦是を願ひ、是を勤むる様ニ有之度候

第四

文武之業ニのみ流れ候て、是を心ニ求メ得ざる者者文武を為ニあらず、是を心ニのミ求めて術を廢するも亦真の文武ニあらず、是を心に求め是を芸術ニ試み、芸よりして心に会得し、心よりして術ニ練達するは文武の本意とこそ申へけれ、近来家中之風俗奢靡に流れ萎弱して見ゆるも、往々文武を心得誤りたる者有之候故にて以の外之事ニ候、夫故芸術迄も口学問・口武芸ニのみ成行、柔情なる者ハ幸の時として是を廢せり、畢竟文武即士道にし

て須臾も離るへからず、五倫五常を本として、上は君父に事へ下ハ朋友に交り、身を脩、家を斉へ、国を治る道なり、此道を踏行に文盲にてハ真智明ならず、道理二闇く心得違多くなり、武道を知られハ心志定らず、体氣弱くして物の用ニ立かたし、故に文学ニよつて徳性を養ひ、条理を明かにし、武芸によつて心胆を練り身体を強健にし、国家干城之用と成へし、文学ハ幼歳を旨とし、長して徳性を原ね、智見を開き、治乱得失を考究し、天理の所存を工夫し、時処位之難易に応じて公共之道を体認して武事に施し、武芸ハ旦暮演習を事として心胆を鍛ひ、千軍万馬の内ニ在つて鉄石の心腸不動不碎、死生を一撃の際ニ決して、泰然たるの心を以て文事を拡充すへし、士道如斯して士風も是を興起すへし、文武素より一道にして、分つて是を説ハ本意ニ非すといへとも、解見易からんか為にかくいへるなり、少壮之士人脊々服膺して是を勉励すへく候

第五

武士ハ其心潔白無欲にして、鄙吝ならざるは尤父子之所愛重也、乍然無欲なれとも取締もなきと、取締あれとも程を知らざるとは、父子の所嫌悪也、故ニ節儉を尚ふ也、節ハ品節にて物事ニ程限りあるを云、儉者儉束にて取締りあるを言、身分之程々を知つて取締りある、是節儉の徳なり、金銀費用のみに拘りたる事にあらず、世人衣食

住或ハ器財の類ニ耽りて、金銀を慳まざる者をさして無欲と称すれとも、是は金銀の方に無欲なれとも翫好ニ多欲なる故、分限を忘れ奢侈に長す、奢侈長すれ者大ニ心術を害し、金銀の為に人に対して不義理成事共出来して士道を尋るに至り、遂ニ奉公も思ふ様ニ者不出来様ニ相成候、故ニ武士者常々必戦を心として、分限ニ応じ不虞之備を充実にせん事をおもへは、今日妄に財を費さるる也、財ハ用ゆへきに臨んで大ひニ用ひ、用ひさるニ当つてハ費す事なし、是財用の節儉なり、我おもへらく、嚴に節儉を令すれハ銘々酒も不被吞、今日之樂も不出来と心得候てハ間違也、分限丈ヶハ酒も吞かよし、樂もなすがよし、只奢侈ニなるかわろし、奢侈増長すれハ今日ハ面白くおかしき様なれとも、終ニ困窮を成し奉公にも障り、不廉恥なる事出来して士道を欠く所行も多く、可生可憐之次第故顛倒前之杖と申譬諭之如く、顛倒せぬ先に此節儉といふ杖を持てよと教ゆる也、能々此教諭を考察可致候

第六

我父子如斯認て及告示候上からハ、万一我父子におゐて是を食言する事を見分候ハ、我子たる家中誰成とも無遠慮直諫すへし、汝等亦万一此教諭を忘却するならば、於我父子これをしかるへし、自今ハ別而臣下を視る事子の如く思ひて親愛せん、臣下ハ親の如く思ひて我父子ニ

事へよ、汝等此盟約を誤る事なかれ、我父子も亦是を誤るましと致決心候、不備

上卿 飛鳥井中納言
職事 坊城左少弁(後政)

二月十六日御登城之處御名大藏大輔与御拝領、且又為御祝御指之

御脇指御拝領

但右二付(飛鳥井雅典坊城俊克)兩伝奏并松平肥後守殿・所司代稻葉長門守殿江御勤(正邦)
(容保)

一於江戸表御用番牧野備前守殿江為御届御使者被指出之
一同断御礼文被指出之、勇姫様も一同断被指出之

口宣案

上卿飛鳥井中納言

元治元年二月廿七日

宣

正四位下源慶永朝臣

宜任大藏大輔

奉

藏人左少弁兼右衛門權佐藤原俊政

松平大藏大輔

上卿

坊城大納言

職事

清閑寺頭(豊房)左中弁

松平大藏大輔

二月廿一日年号元治与改元被仰出、右為御祝儀鮮鯛一折御献上
但御職二付而之被献

一同月廿四日御参内之處於御所襪御用と御免被仰出候旨、兩伝奏衆列座二而御達有之

一同月廿六日右同断二付御登城、御退出掛兩伝奏衆江為御礼御勤

一三月三日上巳為御祝儀御参内、御帰館掛ケ御登城

一同月七日御登城、供奉二而御参内

一同月八日於東叡山貞明院様二十五回御忌御法事二付、御使者御物頭代を以御牌前江御香奠銀一枚被供之

頭代を以御牌前江御香奠銀一枚被供之

一三月九日公方様舞楽為御拝見御参内二付御参内有之、酒饌御頂戴、右二付為御礼二条様并兩伝奏江御勤(齊敬)

一同月十日今度守護職被蒙仰候二付、武器類京都江御廻二相成候二

付、道中掛御勘定奉行木村甲斐守殿江御聞番共々左之通指出候処、
御附札を以御指図有之

松平大藏大輔今般京都守護職被仰付候二付、御警衛向要用之武器類東海道通り京都迄差立申度候二付、取調候処人足数百八拾人程二相成申候、就而者御定人足二応し指立候而ハ日数相懸り延着ニも相成、御警衛向差支候訳柄も有之候二付、右武器類三日ニ振分指立申度候、依之一日六拾人ツ、都合百八拾人、御定之賃錢を以繼立之儀御聞濟被成下候様相願申候、以上

三月十日
松平大藏大輔内
片山栄之進

御附札

書面之趣京都守護職御警衛之廉を以人足百八拾人、三日ニ割合一日六拾人ツ、繼立之儀承置候、追而先触届之節何月幾日及挨拶候段書加可被指出候

子三月

一三月十二日御職中公辺御祝儀事を初惣而御献上物等之儀二付、御用番有馬遠江守殿江御聞番々左之通指出候処、御附札を以御指図有之

松平大藏大輔儀此度守護職被仰付候二付、公辺御祝事等二而献上物、且又御老中方様御始御役方様江進上物、并御老女中様御始江贈物等之儀、如何之振合ニ相心得可然

御座候哉、此段奉伺候、以上

三月十二日

松平大藏大輔内
島津十大夫

御附札

都而総裁職勤中之通相心得候様可仕候

一同日六半時御供揃御乗切二而岡崎御屋敷江被為入、調練御覧有之
一三月十三日公方様御叙任為御祝儀御登城、御太刀・馬代黄金一枚御献上

一同日所司代稻葉長門守殿江御呼出、御聞番島津十大夫罷出候処、左之通御書付御渡有之

袖裏

松平大藏大輔江

右明後十五日辰半刻於飛鳥井亭口宣案可相渡候間、右使者可被指出候

三月十三日

一同日夕伝奏飛鳥井中納言殿亭江御呼出御聞番罷出候処、左之通御書付御渡有之

松平大藏大輔

如願被免参予、但御用之節者参内可有之旨被仰出候事

三月

但右二付二条様・中川宮・山階宮江為御札御使者御物頭被

(朝彦親王)(晃親王)

差出之、両伝奏江御使者御使番被指出之

一二条様江為御札御直勤可被成之处御所旁二付御勤無之

一同日御職二付御固御人数被指出方之儀、所司代稻葉長門守殿江御聞番左之通伺書指出候处、御附札を以御差図有之

松平大蔵大輔京都守護職被仰付候得共、人数到着迄者御警衛之儀ハ松平肥後守様二而、是迄之通御心得被成候様被仰付候处、大蔵大輔人数追々国許に致到着候間、御警衛之儀も相心得申度奉存候、且又是迄松平肥後守様江被仰付置候伏見街道稻荷山辺御固之儀茂、大蔵大輔相心得可申儀二可有御座哉、此段奉伺候、早速御指図被成下候様奉願候、以上

三月十三日

松平大蔵大輔内
千本弥三郎

御附札

書面伺之通相心得、伏見街道稻荷山辺御固場所之儀も請取候様可被致候、右場所受取候者届可被申聞候、且又右伏見街道稻荷山辺御固場所之儀者追而相達候品も可有之候間、其旨御心得可有之候

一同日守護職被蒙仰候為御札、御使者御留守居介大御番片山栄之進

を以、和宮様・天璋院様江縮緬三卷宛、本寿院様江同二卷被指上之、御留守居年寄平賀駿河守殿被謁之

(勝足)

但御老中江御太刀・金馬代一枚充、若年寄中江同断銀馬代五枚充、御側衆江同断三枚充、御本丸老女中江銀二枚ツ、同表使江同一枚ツ、御贈物有之

一三月十四日勅使二条城江参入二付御登城

御衣冠

一同日参予御免被仰出候二付御用番并所司代江左之通届書被指出之昨夜飛鳥井中納言亭江家来之者呼出有之、如願被免参予御用之節ハ参内可致旨被仰出候、此段御届申候、以上

三月十四日

松平大蔵大輔

一同月十五日為月次御進献御使者を以禁裏御所親王御方・准后御方江鮮鯛一折宛御献上

(睦仁、後の明治天皇)
(九条夙子)

但御職二付被献

一同日御登城

昨十四日御老中連名之御切紙来

守護職之御札被仰上、於御座之間御目見、御太刀・馬代

黄金一枚縮緬白五卷御献上

一同日口宣御頂戴二付御使者御番頭代毛受鹿之介

鬚斗目・上下着御聞番同道

伝奏

飛鳥井中納言殿亭江罷出候处、雑掌平岡兵部・野宮宰相中将殿雑

掌西池主水出席、口宣案被相渡候二付請取罷帰差上之

一同日右同断二付御用番有馬遠江守殿・所司代稲葉長門守殿江左之
通届書被指出之

今日於飛鳥井中納言亭大藏大輔改名之口宣案御渡之、難
有仕合奉存候、此段御届申上候、以上

三月十五日

松平大藏大輔

一三月十七日御所勞二付御登城御断之御届、御聞番共指出之

大藏大輔儀昨朝〆不快罷在候処、兎角爾々不仕候二付当
分登城難仕御座候、尤快節者御届可申上候、此段御聞置
被下候様可申上旨被申付候、以上

三月十七日

松平大藏大輔内
伊藤友四郎

一三月十八日公方様〆御使御小納戸塩谷捨五郎殿を以、御懇之上意
を以御尋有之、八丈島(編)壹反・交御肴一台御拝領、右二付即刻御登
城可被成筈之処、御所勞中二付御側衆迄御直書を以御礼被仰上之

一同月十九日所司代稲葉長門守殿〆御呼出二付御聞番罷出候処、左
之通御書付御渡有之

松平大藏大輔

只今迄肥後守守護職中御固相心得罷在候場処々々、御自

分江被請取候様最前相達候得共、引渡之儀今暫見合候様
肥後守江相達候間、可被得其意候事

一四月七日御登城可被成之処昨六日御老中連名之御所勞二付御先手田付御切紙来

主計殿御名代二而御登城有之処、於牡丹之間御老中列座御用番水
野和泉守殿別紙御書付を以御達有之

袖裏

松平大藏大輔

御役御免相願候段無抛儀二被思召候間、願之通御役御免
被成候

但右為御礼御用番江者主計殿被相勤、酒井雅楽頭殿江者御
使者被指出之、二条様・近衛様(忠熙)・両宮・伝奏江御使者被
差出之、於江戸表御礼文被指出之、勇姫様〆も同断被指
出之

一四月八日伝奏野宮宰相中将殿〆御呼出二付御聞番罷出候処、左之
通御書付御渡有之

松平大藏大輔

長々滞京御用精勤苦勞思召候間今度賜御暇候、猶人数残
置、非常之節禁闕警衛有之候様御沙汰候事

四月

但右二付御用番水野和泉守殿・守護職松平肥後守殿・所司

代稻葉長門守殿江為御届御使者被指出之

一 同日御所旁御快二付守護職御免被仰出候為御礼、二条様・近衛様
両宮并両伝奏江御勤、夕方一橋様江御出、夫_レ御登城
(慶喜、後の十五代將軍)

一 四月十日御登城、於御休息所御目見、御懇之上意有之、御手自御
指之御刀御拝領、別段金千両・御菓子御拝領

但於江戸表五月廿一日御礼文被指出之、勇姫様も同断被
差出之

一 同月十一日_巳刻御参内_一昨九日伝奏野宮中納言殿_二御呼出_三而御聞番罷出被
候_一、明後十一日巳刻御暇参内被仰出候段御達有之
拜竜顔、天盃御頂戴、御拝領物有之、且又伝奏野宮中納言殿を以
別紙之通被仰出

松平大藏大輔

去冬依召上京、長々滞在、公武御一和之筋尽力拔群周旋、
且参予并守護職勤仕苦勞被思召之間、被賞之参議正四位
上推任叙被宣下事

四月十一日

但右二付二条様・近衛様・両宮・徳大寺殿_(実則)・両伝奏江御廻

勤、且又二条様并伝奏江為御礼御使者被指出之、御用番
水野和泉守殿江も御礼使者被指出之、守護職松平肥後守
殿・御用番水野和泉守殿・所司代稻葉長門守殿江為御届

御使者被指出之

一 四月十二日右同断二付御使今立五郎大夫・国枝藤兵衛早駆二而御
国表江被指遣之

一 同日今日より宰相様与奉称候様被仰出之
(慶永)

一 四月十三日御登城被成候_一昨十二日御老中連名之_二御奉書来_一
於牡丹之間御老中列
座、御用番水野和泉守殿別紙之通御達有之

松平大藏大輔

去冬依召上京長々滞京、公武御一和之筋尽力拔群周旋、
参与并守護職勤仕苦勞被思召之間、被賞之正四位上宰相
御推任叙被宣下旨及上聞候_一、叡慮之通正四位上宰相被
仰出候

但右二付御用番水野和泉守殿江御勤、酒井雅楽頭殿・所司
代稻葉美濃守殿并若年寄中江御使者被指出之
(正邦)

一 於江戸表御老中・若年寄中・御奏者番・御側衆等江御使
者被指出之同断、御内証_一御礼文被指出之、勇姫様も
同断被差出之

一 右御叙任二付伊勢八幡江為御代_(御奉行兼目付)大井弥十郎京都_一被指
立之、伊勢内宮江銀三枚、同外宮江同断、石清水八幡江
同断被供之

一四月十六日昨十五日伝奏野宮中納言殿^〇御呼出二付、御聞番島津
十大夫罷出候処、明日御推任叙之口宣御渡被成候間、御家来被指
出候様御達有之二付、今日御使者毛受鹿之介<sup>御聞番伊藤友四郎同道
大御番稻葉悦之助指添野</sup>
宮殿亭江罷出候処、位記・口宣御渡有之

但右二付二条様并伝奏衆江為御礼御使者毛受鹿之介被指出
之

口宣案

上卿坊城大納言

元治元年四月十一日 宣旨

正四位下源慶永朝臣

宜叙正四位上

藏人頭左中弁藤原豊房^奉

位記

正四位下源朝臣慶永

右可正四位上

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宜申
榮級、用旌寵章、可依前件、主者施行

元治元年四月十一日

二品行中務卿職仁親王

正五位下守中務大輔臣卜部朝臣教久

正五位上行中務少輔臣藤原朝臣資生

宣

奉

行

正二位行權大納言兼右近衛大將臣 家信

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣 公績

正二位行權大納言臣 実徳

正二位行權大納言兼太宰權帥臣 俊克

正二位行權大納言臣 忠順

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

從二位行權大納言臣 道孝

權大納言正三位臣

正二位行權中納言臣 実順

從二位行權中納言臣 雅典

從二位行權中納言臣 有容

從二位行權中納言臣 為理

從二位行權中納言臣 重胤

從二位行權中納言臣

從二位行權中納言臣 光愛

從二位行權中納言臣 通富

從二位行權中納言臣 定功

從二位行權中納言臣実麗等言

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言

元治元年四月十一日

制可

月日辰時正四位上行大外記兼助教中原朝臣師身

右中弁

関白從一位行左大臣朝臣

太政大臣闕

右大臣正二位朝臣

内大臣正二位兼行左近衛大将朝臣

兵部卿闕

正四位下行兵部大輔紀季

参議正四位上右大弁

告正四位上源朝臣慶永奉

制書如右、符到奉行

從四位下行兵部少輔兼出羽守貞彝

大録

少録

少録

元治元年四月十一日

口宣案

上卿坊城大納言

元治元年四月十一日 宣旨

前左近衛權中將源慶永朝臣

宜任参議

藏人頭權右中弁藤原勝長^奉

前左近衛權中將源朝臣慶永

正二位行權大納言兼太宰權帥藤原朝臣俊克

宜奉 勅件人宜令任

参議

元治元年四月十一日大外記兼助教中原朝臣師身^奉

越前宰相

上卿 坊城大納言^(勝長)

職事 甘露寺頭權右中弁

位署

参議正四位上行大藏大輔源朝臣

右職事裏松殿江問合

ノ

一 同日御推任叙之御礼、且又口宣御頂戴二付而之為御礼御参内

一 四月十八日明日御発駕二付御登城、於御座之間御懇之上意有之、

御手自御三所物御拝領、右御礼於御城被仰上之

但於江戸表御用番江御礼使者被指出之、御内証も御礼文

被指出之、勇姫様も同断被指出之

一同日御使御小納戸塩谷捨五郎殿を以御袴・交御肴御拝領、依之御側衆迄御直書を以御礼被仰上

但於江戸表御用番江御礼使者被指出之、御内証も御礼文被指出之、勇姫様も同断被差出之

一四月十九日京都御発駕、東近江路御旅行

一四月廿三日福井御着

一同月廿五日今度御推任叙二付勇姫様御事御簾中様与御唱二相成候而可然旨、伝奏野宮殿雜掌申聞候儀二付、猶又御聞番伊藤友四郎坊城殿雜掌江内々相伺候処、御国表二而御簾中与御唱之儀何も御差支之儀無之旨被申聞之

一同日右同断二付今日も御国許二而者御簾中様与奉称候様被仰出之

一五月十五日大坂中ノ島御屋敷江御小人目付も、唯今御拝領物有之候間御城江御家来被罷出候様申来候二付、毛受鹿之介罷出候処於猪之間御側衆土岐下野守殿御逢、先日者御手簞笥御献上被成格別御喜悅被遊候、依之為御答礼此御箱之品被遣候旨被仰出候間、此儘御国許江相廻候様、且又御礼勤等二八不及旨御達有之

一五月十六日公方様大坂城御発駕、(大坂市)安治川口より御乗船二而御東帰

一同月晦日御用番板倉周防守殿も御呼出二付、御聞番介津田左藏罷出候処、左之通御書付公用人を以被相渡之

袖裏

松平大藏大輔

守護職勤役中御役知高五万石余当子年物成之儀、二月分迄松平肥後守江被下候間、三月・四月分収納候様可被致候

一六月三日御簾中様三国辺江為御遊覧被為入、七日御帰殿

一同月五日御推任叙之御礼御名代二而被仰上度旨之御願書、御先手小倉新左衛門殿を以御用番井上河内守殿江御進達二相成

一同月八日於増上寺天親院様(家定室有姫)十七回御忌御法事有之二付、公方様為御機嫌伺御菓子一箱被献之

一六月十日右同断二付御使者御物頭を以増上寺御靈前江香奠銀一枚被供之

一同日右同断御法事済二付御機嫌御伺之御文被指出之

一同月十五日昨十四日御用番牧野備前守殿^〆御呼出二付、御聞番草尾精一郎罷出候処、明日四時為御名代一人田安飯御殿江登營有之候様御書付御渡有之、依之為御名代主計頭様田安飯御殿江御登營之處、於御白書院縁頼替席御推任叙之御礼御申上被成、御老中井上河内守殿被謁之、御太刀・馬代^{黄金}縮緬五卷被献之、和宮様・天璋院様江縮緬五卷・干鯛一箱^{代金三百足}宛被指上之、本寿院様江紗綾三卷・干鯛一箱^{代金三百足}被差上之

但御留守之御老中稲葉美濃守殿并若年寄中江御使者被指出之、御内証^〆御礼文被指出之、勇姫様^〆も同断被差出之

一同月十八日右同断二付御内証^〆御文を以公方様江昆布一箱^{代金三百足}干鯛一箱^{代金三百足}御樽一荷^{代金千足}被献之、和宮様・天璋院様江干鯛一箱^{代金三百足}御樽一荷^{代金千足}ツ、被差上之、本寿院様江干鯛一箱^{代金三百足}被指上之

一同日右同断二付勇姫様^〆御文を以公方様・和宮様・天璋院様江干鯛一箱^{代金三百足}宛被献之

一七月廿日所司代松平越中守殿^〆御呼出二付御聞番罷出候処、左之通御書付被相渡之

袖裏

松平大蔵大輔

伏見其外屯集之長州人、御所近辺江押寄乱妨及ひ、処々放火等致し不容易形勢二付、早々上京候様可被致候、以上

七月

一同月廿三日去朔日公方様・和宮様西丸江御移徙被為濟候二付、御歛之御文被指出之、且又御機嫌御伺之御文も被指出之、勇姫様^〆も同断被指出之

一七月廿五日去廿日所司代松平越中守殿^〆御達有之候儀二付、御同所江御聞番共^〆左之通差出之

伏見其外屯集之長州人、御所近辺江押寄乱妨二及ひ、処々放火等致し不容易形勢二付、松平大蔵大輔早々上京候様御書付を以被仰出、以早打申越奉畏候、大蔵大輔儀先月来歴節風相発爾々不仕、其上瘡疾相煩難儀仕候得共、方今之御時態故精々養生を加へ、少茂快候ハ、早急上京仕度奉存候、此段申上候様国許^〆申付越候、以上

七月廿五日

松平大蔵大輔内
島津十大夫

一同月廿六日御所^〆重臣御呼出二付、御家老山県三郎兵衛罷出候処、一橋様御直命二而御上京被成候様被仰出、且又長州御征伐御総督御内命有之二付、即日為御使三郎兵衛御目付浅井権十郎差添、堤

五市郎早驅二而御国江罷越

一七月廿九日一橋様(安愛)為御使御目付戸川鉦三郎殿福井着、昼後登城、

夫ハ御庭通り御座所江被罷出御逢有之、翌晦日鉦三郎殿又々登城、昨日之通御座処江被罷出御逢御返答被仰上、御手自馬上筒一挺外二白銀拾五枚被遣之

一八月四日於東叡山(家定)温恭院様七回御忌御法事有之二付、公方様御機

嫌為御伺御文被指出之、勇姫様ハも同断被指出之

一同月五日右同断二付御使者を以公方様江干瓢一箱被献之

一同月七日右同断御法事済二付公方様・和宮様・天璋院様江御文被指出之、且又天璋院様江御菓子落雁一箱被指上之

一同月九日右同断二付御使者御物頭を以東叡山御靈前江御香奠銀二枚被献之、同処本坊江相納之

一九月朔日御上京御猶予御願之儀二付、御老中稲葉美濃守殿江御聞番ハ左之通指出候処、御附札を以御指図有之

松平大藏大輔儀先達而致上京候様御沙汰之処、病氣二付御猶予之儀相願、快氣次第出立仕筈二御座候、然ル処此

度越前守儀、(茂昭)松平大膳大夫御征伐之副將被仰付候二付而

者、家来共も多分召連罷出候二付、此上大藏大輔致上京候事二相成候而者召連候人数も整兼、且国許無人二相成締り方も不行届様可相成哉与心痛仕候、依之大藏大輔上京之儀、越前守出陣中者何卒御用捨被成下候様仕度、此段奉願候様申付越候、以上

九月朔日

松平大藏大輔内
島津十大夫

御附札

可為願之通候

一九月三日三ノ丸御普請出来二付仮御引移有之、御簾中様・安姫様(男姫)
二も同処大奥江仮御引移有之

一十一月廿九日茂昭様小倉表御着二付御歛并全軍江御書被成、為御使御用人永見主膳・御馬廻り毛利元藏被指遣之(北九州市)

御直筆

今度長防御征討全軍無滞小倉到着、且寒氣之時分長々苦(長門・周防)勞可致与太儀二存候、此上可抽精忠、別而山陽之海風相厭候事專一二存候、此段全軍江可申聞者也

但全軍江御酒被下之

一十二月三日於増上寺泰明院様廿三回御忌御法事有之二付、御使者(十一代將軍家齊女)

を以御牌前江御香奠銀一枚被供之

(近江国)

一十二月四日江州路出張之御目付中々書狀到着之儀ニ付、早鐘・早太鼓ニ而三丸御座所江諸月番呼出、張出シニ而為相知之

(下野国)

野州脱走之浪士凡千人程、美濃々山越ニ而其地江向ケ走候趣ニ付而ハ、難所々々等断切速ニ討取方有之候様可被致候、此段急申達候、以上

十二月二日

江原桂介

松平大藏大輔殿

重役中

追而最寄諸侯江も此書狀を以御申合、嚴備御尽力可有之候

右之通今曉江原桂介殿御達有之候ニ付、銘々厚相心得早急致用意、御下知相待候様被仰出候

追而当分之处相月番之内申合、一人ツ、三丸御座所江相詰罷在候様可致候事

一着具・鉄砲・胴乱・玉薬・腰兵糧可致持参事

一急変出張之相図

早鐘 下馬内
米町

早太鼓 刻場

右相図次第銘々着具・鉄砲・胴乱・玉薬・腰兵糧持参、下馬御門内江直様出場可致事

一十二月五日右同断ニ付所司代松平越中守殿々御呼出、御聞番罷出候处、公用人を以左之通御書付被相渡之

袖裏

松平越前守
家来

(常陸・下野)

常野脱走之賊徒共越前海辺江落行候哉ニも相聞候、其領分可相通茂難斗、嚴重手当致し見掛次第不洩打捕可申、万一打洩候ハ、他領迄も附入打捕候様可被致候、此段相達候

十二月

一同日右同断浪士一件ニ付大野領江被指出置候探索方々注進ニ付、

(慶喜)

御人数夫々出張被仰付、且又一橋中納言様為御鎮静去三日京都御出馬、東近江路々御進発之由ニ付、右探索之者々指出候書付且御人数御差出ニ相成候儀、御案内旁一橋様御出張先迄被指出之

一十二月六日右同断ニ付江州路出張之御目付中江左之通指出之

野州脱走浪士之儀此間御達御座候ニ付、隣領江も申達夫

(大野郡)

々手配致置候处、美濃路々越前国境蠅帽子ト申峠を越、

一昨四日晚大野領分秋生と申所江止宿可致趣ニ而、追々

大野表之方江罷通り可申様子大野表々申来候、依之尚又越前守増人数為手当指向候得共、此節征長出張中ニ而人数少ニ付行届兼心配致居申候、尤精々年少人数手配仕候

得共、何方江罷通候哉難斗御座候、此段御届申上候、以上

十二月六日

松平大藏大輔内
村田巳三郎
(氏寿)

一十二月八日右同断二付大目付滝川播磨守殿・御目付織田市藏殿(具举)方宿繼を以今晚左之通封状来

別紙二通越前国内諸藩江相達候間、此段為心得申達候、以上

十二月五日

織田市藏
滝川播磨守

松平大藏大輔殿
重役中

常野脱走之賊徒共越前路之方江罷越候趣二付、右国内諸侯々々嚴重相固候者勿論之儀二有之候得共、要撃機會を失ひ万一京都江迫近候而者不容易候二付、急速国堺迄人数繰出し夫々申談可致追討旨、一橋中納言殿方松平大藏大輔江被仰進候二付而者、右国内諸侯江も為心得可相達旨中納言殿被仰聞候間、此段申達候、以上

十二月五日

織田市藏
滝川播磨守

賊徒共越前路迄も脱走、此上何処迄落延候哉も難斗、中納言殿出張追討被致候茂、必竟帝都迫近不致速二討滅相成候様被致度趣意二有之候得共、軍中之儀流言浮説等二

而衆心疑惑を生し候而ハ不都合二付、右様之儀ニ聊拘泥不致無二念追討鑿殺致し候之様、尚又屹度可相達旨中納言殿被仰聞候間、此段申達候、以上

十二月五日

織田市藏
滝川播磨守

一十二月九日右同断浪士次第第二御国地江深入、(南条郡)今庄駅江止宿可致体之由追々注進有之二付、於同所討留可申御手筈二而御出馬之儀被仰出、右二付左之通張出二而諸向江為相知之

常野脱走之賊徒御討伐之儀従公刃被仰出、且又今度一橋中納言様諸藩之兵を御牽ひ御進発有之、各藩二おゐても無油断及追討候様一橋中納言様方被仰越候二付、為御追討宰相様御出馬被遊候、本多興之輔江先手被仰付儀二候(慶永)
(副元、家老)
間、一同此旨厚相心得尽粉骨抽忠勤候様被仰出候
右之通被仰出候二付組支配有之面々者此旨申渡、兼而被仰出候相図次第下馬御門内江相詰可申事

一同日右同断二付大目付滝川播磨守殿・御目付織田市藏殿方宿繼を以左之通封状相達候二付、御領主方へ御人数繰出之儀申達之

賊徒共越前路江立越候趣相聞候二付、船場方何方江船路脱出可致も難斗候二付、御用之外一切出船不相成様可申(一橋)
(忠毗、鞠山藩主)
達旨中納言殿被仰聞候、尤酒井飛驒守・有馬遠江守・土(利)

恒、大野藩主(詮道、鯖江藩主)、長守、勝山藩主
井能登守・間部正治・小笠原左衛門佐江者右之趣相達候

得共、其余右国内領分知行有之向江者大藏大輔殿〇可被

成御達旨是又被仰聞候間、此段申達候、以上

十二月七日

織田市藏

滝川播磨守

松平大藏大輔殿

重役中

一十二月十日右同断御出陣二付、夕七半時早鐘・早太鼓二而御旗本

御備御軍勢下馬御門三丸御座所江相集、御本城橋辺〇下馬御門辺

迄二御軍列立居、夜四時三丸中ノ口〇御出馬其節中ノ口前二而祝砲下
三發足並太鼓二而押陣

馬御門内二而軍神勸請、曳王之勝鬨御式有之、鉄御門〇桜御門、

本町通り御行軍

一十二月十一日(足羽郡)曉浅水駅御着、夫〇九半時同駅御出馬、七時水落駅(今立郡)

二御宿陣

一同月十二日(南条郡)二屋御関所番人〇左之通注進有之

昨十一日未上刻二屋御関所江陣羽織着之者罷越、今度水

戸藩中京師江歎願之儀有之、武田伊賀守初同藩千余人上(耕雲齋)

京致候旨申聞致通行候事

一同日朝六半時水落御出馬、上鯖江宿二而御小休、夫〇府中本多興(今立郡)
(南条郡武生)

之輔館表書院御借受、御陣所二相成

一同月十六日府中御陣所江大目付滝川播磨守殿・御目付由比図書殿
〇宿繼を以左之通封状来

(南条郡)

賊徒今庄辺江屯集致し候哉二相聞候間、木ノ目峠〇不落

延様同所二おゐて諸手申合、無二念奮戰鏖殺致し候様可

相達旨中納言殿被仰聞候間、此段申達候、以上

十二月十一日

由比図書

滝川播磨守

松平大藏大輔殿

重役中

賊徒共越前今庄江屯集之由二付、中納言殿明十三日大津

駅御出立、大溝江御本陣被振替候之旨被仰聞候間、此段(滋賀県高島市)

申達候、以上

十二月十二日

由比図書

滝川播磨守

松平大藏大輔殿

重役中

賊徒共歎願筋之儀有之趣を以、加州始段々手弛ミ候模様(加賀国)

二相聞候処、右様之儀二取合要撃之機会を失候而者大事

二可及者勿論、たとへ如何様之歎願筋二候而も、一旦公

辺御人数江敵対候ものとも二而、加州始其外諸藩江申諭、

早々手筈之上不残討取候様可致旨中納言殿被仰聞之旨、

此段申達候、以上

十二月十三日

織田市藏

由比図書

滝川播磨守

松平大蔵大輔殿

重役中

追討期限、(敦賀郡)葉原加州陣処^〆手筈之上今十六日九時相始メ

可申旨、先手^〆申来ル

一十二月十八日昨十七日浪士(敦賀郡)新保宿二屯集、諸藩之人数押寄候二付

加州之手江降伏状差出候趣二付、一橋様御陣所江左之通指出之

賊徒共追々取詰討伐之手筈二御座候处、(前田齊泰)葉原駅加賀中納

言様御人数出張先江降伏状差出、魁首之者共面縛、武器

等も指出候二付、御同人様重役^〆其御本陣江取斗方之儀

伺出候由、依之右伺中戦闘暫猶予致呉候様大蔵大輔様御

人数先江申越候、右二付如何相心得可申哉、御指図可被

成下候、此段大蔵大輔様被仰聞候、以上

十二月十八日

松平大蔵大輔内

武曾権左衛門

横山鍊藏

一十二月廿一日歳暮為御祝儀老女中奉文を以和宮様・天璋院様^(領)之通御拝拝物有之、御内証^〆御札文被指出之、勇姫様^〆も同断被指出之

但當御時態二付御使相止奉文二相成候事

一同月廿四日朝六半時為御帰陣府中御出馬、(今立郡)家久村二御床机立、水

落二而御床机立、浅水二而御昼、(足羽郡)荒井端之茶屋二御床机立、夫^〆

孝顕寺前二而踏止、孝顕寺江御参詣、相濟下馬御門内二而御先供

初御供之面々、鉦二而折敷御床机立、軍神送声勝鬨之御式、曳音

三度被為揚、諸兵王音三度繼之、畢而御供之面々江御意有之、七

半時過三丸御座所江御着、諸隊揚取

但今日運正寺江者御参詣無之二付、為御代拝御用人稲垣治

部相勤

一十二月廿五日浮浪之徒一件二付、御目付由比図書殿・織田市藏殿

〆宿繼二而左之通封状来

此度降伏賊徒加賀中納言家来江当分御預メ相成候二付而

者、為追討出張之人数別紙日割之通混乱無之様帰陣可被

致候、此段申達候、以上

十二月廿三日

織田市藏

由比図書

松平大蔵大輔殿

重役中

廿四日

松平肥後守人数

(敦賀郡)正田宿引払之事

同日

松平越中守人数

一手者廿四日敦賀表迄引揚、翌廿五日同処引弘之事
一手者廿六日出張先引弘帰陣之事

廿五日

松平出雲守組共
(定安)

一橋殿人数

佐久間小左衛門引率
之分

敦賀表引弘之事

廿六日

松浦加賀守
(平)前田齊泰

松平美濃守人数
(黒田長博)

藤堂和泉守人数
(高鯨)

松平大藏大輔殿人数
(直憲)

廿五日
申合帰陣之事

井伊掃部頭人数
(氏彬)

戸田采女正人数
(忠氏、小浜藩主)

廿七日

酒井若狭守人数
(忠氏、小浜藩主)

書面日割之通相心得帰陣可致儀二ハ候得共、前後見合休泊等不混様勘弁帰陣可被致候

十二月廿三日

賊徒共越前路江立越候趣二付、船場ハ何方江船路脱走可致も難斗候二付、御用之外一切出船不相成様可申達旨、
(一橋)
中納言殿被仰聞候二付、酒井飛驒守・有馬遠江守・土井能登守・間部正治・小笠原左衛門佐江相達候間、其余右国内領分知行有之向江者大藏大輔殿ハ御達可有之旨、滝川播磨守・織田市藏ハ申達置候処、賊徒共此度降伏二付

都而前々之通可被相心得候、此段申達候、以上

十二月廿三日

由比図書

松平大藏大輔殿
重役中

一十二月廿六日右同断荻野小四郎手・狛主税介手・狛政之助手・松平源太郎手差配大砲手凱陣二付、下馬御門内江被為出行軍御覽、御意有之、勇姫様ニも下馬御門内御用屋敷ニ而御透見有之

一同日右同断本多興之助凱陣二付、御手許ハ御使御馬廻り浅見徳太郎被遣之

一同月廿八日右同断二付今度御供之面々并出張之面々、御留守御用相勤候面々江神酒頂戴被仰付、御本丸於鶴間御家老中始高知ハ新番格迄、惣御医師・子弟輩共、隠居・休息之面々
神酒自分ニ頂戴之
於長炉之間与力・小役人ハ小寄合格・御坊主迄子弟輩共、御用相勤候御目見医并町医共、於御勘定所無格諸下代ハ末々迄子弟輩共農兵迄、同廿九日出張召連候陪臣并御留守御用相勤候陪臣之者共ハ、於御勘定所切手渡二而御酒被下之

一同日左之通諸月番江被仰出之趣張出之

今度賊徒御国地江入込候二付、為追伐出張被仰付候面々并宰相様御供一同、寒天之節数日之対陣必死之尽力相勤

御満足被思召候、右二付而ハ時節柄与申是迄可為難儀二
付、相応之御取扱も被成度候得共、追々未曾有之御大費
二而不被為任思食候、依之侍中始末々迄乍小分御手当被
成下候、且又御手配二而御留守御用相勤候面々も以割合
御手当被下置筈二候、委細之儀ハ御勘定処可申聞候、
此段申渡候様被仰出候

右之趣支配有之面々者末々迄可被申渡候

ノ